

九州大学工学部平成 16 年度編入学試験問題 数学

1 問題

次の連立一次方程式 $Ax = b$ を考える。ただし、

$$A = \begin{pmatrix} 2 & 3 & 0 \\ 4 & 8 & 4 \\ 0 & 6 & 14 \end{pmatrix}, \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}, \mathbf{b} = \begin{pmatrix} 5 \\ 16 \\ 20 \end{pmatrix}$$

である。このとき、以下の問いに答えよ。

1. 上三角行列 U と、対角成分が 1 の下三角行列 L を用いて、 $A = LU$ と書くとき、 L, U を求めよ。
2. $Ax = b$ の解は以下の 2 つの問題を解くことで求めることを説明せよ。

$$\begin{cases} Ly = b \\ Ux = y \end{cases}$$

3. 2. の方法で $Ax = b$ を解け。

1.1

行列 L, U をそれぞれ次のように置く。

$$U = \begin{pmatrix} u_1 & u_2 & u_3 \\ 0 & u_4 & u_5 \\ 0 & 0 & u_6 \end{pmatrix}, L = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ l_1 & 1 & 0 \\ l_2 & l_3 & 1 \end{pmatrix}$$

$A = LU$ を求める。

$$\begin{aligned} LU &= \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ l_1 & 1 & 0 \\ l_2 & l_3 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} u_1 & u_2 & u_3 \\ 0 & u_4 & u_5 \\ 0 & 0 & u_6 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} u_1 & u_2 & u_3 \\ l_1 u_1 & l_1 u_2 + u_4 & l_1 u_3 + u_5 \\ l_2 u_1 & l_2 u_2 + l_3 u_4 & l_2 u_3 + l_3 u_5 + u_6 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 2 & 3 & 0 \\ 4 & 8 & 4 \\ 0 & 6 & 14 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

各成分について次式が成り立つ。

$$\begin{aligned} u_1 &= 2 \\ u_2 &= 3 \\ u_3 &= 0 \\ l_1 u_1 &= 4 \rightarrow l_1 = 2 \\ l_1 u_2 + u_4 &= 8 \rightarrow u_4 = 2 \\ l_1 u_3 + u_5 &= 4 \rightarrow u_5 = 4 \\ l_2 u_1 &= 0 \rightarrow l_2 = 0 \\ l_2 u_2 + l_3 u_4 &= 6 \rightarrow l_3 = 3 \\ l_2 u_3 + l_3 u_5 + u_6 &= 14 \rightarrow u_6 = 2 \end{aligned}$$

行列は次のようになる。

$$U = \begin{pmatrix} 2 & 3 & 0 \\ 0 & 2 & 4 \\ 0 & 0 & 2 \end{pmatrix}, L = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 2 & 1 & 0 \\ 0 & 3 & 1 \end{pmatrix}$$

1.2

$$\begin{cases} Ly = b \\ Ux = y \end{cases}$$

1.1 で求めた行列 L は $|L|=1$ であるから、逆行列 L^{-1} を持つ。行列 L を含む式に、逆行列 L^{-1} をかける。

$$\begin{aligned} Ly &= b \\ y &= L^{-1}b \end{aligned}$$

y を行列 U を含む式に代入する。

$$Ux = L^{-1}b$$

行列 U も同様に逆行列 U^{-1} を持つ。逆行列行列 U^{-1} をかけ、 x について解く。

$$\begin{aligned} x &= U^{-1}L^{-1}b \\ &= (LU)^{-1}b \\ &= A^{-1}b \end{aligned}$$

このように、 x について求めると、方程式 $Ax = b$ を解いた場合に等しい解が得られることが分かる。

1.3

行列 U, L の逆行列 U^{-1}, L^{-1} を求める。

$$U^{-1} = \frac{1}{4} \begin{pmatrix} 2 & -3 & 6 \\ 0 & 2 & -4 \\ 0 & 0 & 2 \end{pmatrix}, L^{-1} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ -2 & 1 & 0 \\ 6 & -3 & 1 \end{pmatrix}$$

1.2 の式を用いて、 y, x を求める。

$$\begin{aligned} y &= L^{-1}b \\ &= \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ -2 & 1 & 0 \\ 6 & -3 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 5 \\ 16 \\ 20 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 5 \\ 6 \\ 2 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} x &= U^{-1}y \\ &= \frac{1}{4} \begin{pmatrix} 2 & -3 & 6 \\ 0 & 2 & -4 \\ 0 & 0 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 5 \\ 6 \\ 2 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

2 問題

1. 次の線形非同次微分方程式

$$\frac{dy}{dx} + P(x)y = Q(x)$$

の一般解は

$$y = e^{-\int P(x)dx} \left(\int Q(x)e^{\int P(x)dx} dx + c \right)$$

で与えられることを示せ。ただし、 $P(x), Q(x)$ は x の連続関数あり、 c は任意の定数である。

2. 次の微分方程式の一般解を求めよ。

$$x \frac{dy}{dx} - y = x(1 + 2x^2)$$

3. 適切な変数変換を利用して、次の微分方程式の一般解を求めよ。さらに、 $x = 1, y = 1$ となるような解を求めよ。

$$\frac{dy}{dx} - \frac{y}{2x} = \frac{\log x}{2x} y^3$$

2.1

同次方程式の解を求める。

$$\begin{aligned} \frac{dy}{dx} + P(x)y &= 0 \\ \frac{1}{y} \frac{dy}{dx} &= -P(x) \end{aligned}$$

積分定数を c として積分する。

$$\begin{aligned} \ln y &= -\int P(x)dx + c \\ y &= e^{-\int P(x)dx + c} \\ &= ce^{-\int P(x)dx} \end{aligned}$$

非同次解を求める。

$$\frac{dy}{dx} + P(x)y = Q(x)$$

定数変化法を用いる。同次方程式の解から、解を次のように仮定する。

$$y = u(x)e^{-\int P(x)dx}$$

方程式に代入する。

$$\frac{du(x)}{dx} e^{-\int P(x)dx} - P(x)u(x)e^{-\int P(x)dx} + P(x)u(x)e^{-\int P(x)dx} = Q(x)$$

$$\frac{du}{dx} = Q(x)e^{\int P(x)dx}$$

積分定数を c として積分し u を求める。

$$u(x) = \int Q(x)e^{\int P(x)dx} dx + c$$

以上より、一般解は次のようになる。

$$y = e^{-\int P(x)dx} \left(\int Q(x)e^{\int P(x)dx} dx + c \right)$$

2.2

$$x \frac{dy}{dx} - y = x(1 + 2x^2)$$

x で両辺を割る。

$$\frac{dy}{dx} - \frac{1}{x}y = x(1 + 2x^2)$$

2.1 の公式を使う。ここで、 $P(x) = -\frac{1}{x}$, $Q(x) = 2x^2 + 1$ である。

$$\begin{aligned} y &= e^{\int \frac{1}{x} dx} \left\{ \int (2x^2 + 1)e^{-\int \frac{1}{x} dx} dx + c \right\} \\ &= e^{\ln x} \left\{ \int (2x^1 + 1)e^{-\ln x} dx + c \right\} \\ &= x(x^2 + \ln x + c) \end{aligned}$$

2.3

$$\frac{dy}{dx} - \frac{y}{2x} = \frac{\ln x}{2x} y^3$$

これは、 $\frac{dy}{dx} + P(x)y = Q(x)y^n$ の形の微分方程式であり、ベルヌーイの微分方程式と呼ばれる。したがって変数変換は、 $y^{1-n} = z$ とすればよく、この場合は次のようになる。

$$y^{-2} = z, y = z^{-\frac{1}{2}}$$

$$\frac{dy}{dx} = -\frac{1}{2}z^{-\frac{3}{2}} \frac{dz}{dx}$$

方程式を書き換える。

$$-\frac{1}{2}z^{-\frac{3}{2}} \frac{dz}{dx} - \frac{1}{2x}z^{-\frac{1}{2}} = \frac{\ln x}{2x}z^{-\frac{3}{2}}$$

$-2z^{\frac{3}{2}}$ をかけ、式を整理する。

$$\frac{dz}{dx} + \frac{1}{x}z = -\frac{\ln x}{x}$$

z の一般解は、 $P(x) = \frac{1}{x}$, $Q(x) = -\frac{\ln x}{x}$ とし、2.1 の公式にから求められる。

$$\begin{aligned} z &= e^{-\int \frac{1}{x} dx} \left\{ -\int \frac{\ln x}{x} e^{\int \frac{1}{x} dx} dx + c \right\} \\ &= \frac{1}{x} \left\{ -\int \frac{\ln x}{x} x dx + c \right\} \\ &= -\frac{1}{x} \{x \ln x - x + c\} \end{aligned}$$

変換 $z = y^2$ を元に戻すと、 y が求められる。

$$y = \frac{\pm \sqrt{x}}{\sqrt{x - x \ln x + c}}$$

境界条件 $y = 1, x = 1$ を代入する。

$$\begin{aligned} 1 &= \frac{1}{\sqrt{1 + c}} \\ &\rightarrow c = 0 \end{aligned}$$

したがって、境界条件を満たす特殊解は次のようになる。

$$y^2 = \frac{1}{1 - \ln x}$$

3 問題

$f = x^2 + y^2 + \frac{1}{4}z^2 - 1$ とする。座標系の原点を O , x, y, z 軸上で正の向きを持つ単位ベクトルをそれぞれ i, j, k とし、以下の問いに答えよ。

1. スカラー場 f の勾配を計算せよ。
2. 曲面 $f = 0$ 上の点 $P(x_0, y_0, z_0)$ における勾配ベクトル \mathbf{a} とベクトル OP とのなす角を θ を用いて表せ。
3. $x = \sin \theta \cos \phi, y = \sin \theta \sin \phi, z = 2 \cos \theta$ とおく。ただし、 $0 \leq \theta \leq \pi, 0 \leq \phi < 2\pi$ である。曲面 $f = 0$ 上の点 $Q(\sin \theta \cos \phi, \sin \theta \sin \phi, 2 \cos \theta)$ における接平面を張る 2 つのベクトルの組を示し、法線ベクトルを計算せよ。
4. 3. と同じ条件で、 $0 \leq \theta \leq \theta_0, 0 \leq \phi \leq 2\pi$ により囲まれる曲面の面積を $S(\theta)$ とする。 $\frac{dS}{d\theta_0}$ を求めよ。ただし、 $0 \leq \theta_0 \leq \pi$ である。

3.1

勾配をとめる。

$$\text{grad}(f) = (2x, 2y, \frac{1}{2}z)$$

3.2

$P(x_0, y_0, z_0)$ における勾配ベクトル \mathbf{a} は次のようになる。

$$\mathbf{a} = (2x_0, 2y_0, \frac{1}{2}z_0)$$

ベクトル OP は次のようになる。

$$OP = (x_0, y_0, z_0)$$

内積をとる。

$$\begin{aligned} \mathbf{a} \cdot OP &= |\mathbf{a}| |OP| \cos \theta \\ \cos \theta &= \frac{\mathbf{a} \cdot OP}{|\mathbf{a}| |OP|} \end{aligned}$$

ただし、 θ は 2 つのベクトルのなす角である。 θ を求める。

$$\mathbf{a} \cdot OP = 2x_0^2 + 2y_0^2 + \frac{1}{2}z_0^2$$

ここで、 $f = 0$ より、 $x_0^2 + y_0^2 = 1 - \frac{1}{4}z_0^2$ を代入する。

$$\mathbf{a} \cdot OP = 2(1 - \frac{1}{4}z_0^2) + \frac{1}{2}z_0^2 = 2$$

また、絶対値の積も同様に $x_0^2 + y_0^2 = 1 - \frac{1}{4}z_0^2$ を用いて次のようになる。

$$\begin{aligned} |\mathbf{a}| |OP| &= \sqrt{x_0^2 + y_0^2 + z_0^2} \sqrt{4x_0^2 + 4y_0^2 + \frac{1}{4}z_0^2} \\ &= \sqrt{1 - \frac{1}{4}z_0^2 + z_0^2} \sqrt{4(1 - \frac{1}{4}z_0^2) + \frac{1}{4}z_0^2} \\ &= \sqrt{1 + \frac{3}{4}z_0^2} \sqrt{4 - \frac{3}{4}z_0^2} \end{aligned}$$

したがって、2 つのベクトルがなす角は次のようになる。

$$\theta = \cos^{-1} \left\{ \frac{8}{\sqrt{4 + 3z_0^2} \sqrt{16 - 3z_0^2}} \right\}$$

3.3

問題で与えられているように、 x, y, z はそれぞれ θ, ϕ と次の関係にあるものとする。

$$\begin{cases} x = \sin \theta \cos \phi \\ y = \sin \theta \sin \phi \\ z = 2 \cos \theta \end{cases}$$

x, y, z により作られる曲面を表すベクトルを r とする。

$$\mathbf{r} = \mathbf{r}(\theta, \phi) = \mathbf{r}(x, y, z)$$

一方、与えられた x, y, z を f に代入すると次のようになる。

$$\begin{aligned} f &= \sin^2 \theta \cos^2 \phi + \sin^2 \theta \sin^2 \phi + \cos^2 \theta - 1 \\ &= \sin^2 \theta (\cos^2 \phi + \sin^2 \phi) + \cos^2 \theta - 1 \\ &= 0 \end{aligned}$$

したがって曲面 $Ff = 0$ と x, y, z からなるベクトル r により与えられる曲面は同じ曲面である。

曲面 $r(\theta, \phi)$ の接平面に含まれる 2 組のベクトルは次のようになる。

$$\begin{aligned} \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial \theta} &= (\cos \theta \cos \phi, \cos \theta \sin \phi, -2 \sin \theta) \\ \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial \phi} &= (-\sin \theta \sin \phi, \sin \theta \cos \phi, 0) \end{aligned}$$

法線ベクトル n はこの 2 組の外積である。

$$\begin{aligned} \mathbf{n} &= \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial \theta} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial \phi} \\ &= \begin{vmatrix} \mathbf{i} & \mathbf{j} & \mathbf{k} \\ \cos \theta \cos \phi & \cos \theta \sin \phi & -2 \sin \theta \\ -\sin \theta \sin \phi & \sin \theta \cos \phi & 0 \end{vmatrix} \\ &= \mathbf{i}(2 \sin^2 \theta \cos \phi) + \mathbf{j}(2 \sin^2 \theta \sin \phi) + \mathbf{k}(\sin \theta \cos \theta \cos^2 \phi + \sin \theta \cos \theta \sin^2 \phi) \end{aligned}$$

3.4

曲面の面積は、曲面を作るベクトル r を用いて次のように表される。

$$\begin{aligned} S(\theta_0) &= \iint_D \left| \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial \theta} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial \phi} \right| d\theta d\phi \\ &= \int_0^{2\pi} \int_0^{\theta_0} \sqrt{4 \sin^4 \theta + \sin^2 \theta \cos^2 \theta} d\theta d\phi \\ &= 2\pi \int_0^{\theta_0} \sqrt{4 \sin^4 \theta + \sin^2 \theta (1 - \sin^2 \theta)} d\theta \\ &= 2\pi \int_0^{\theta_0} \sin \theta \sqrt{3 \sin^2 \theta + 1} d\theta \end{aligned}$$

$\cos \theta = X$ とおくと、 $-\sin \theta d\theta = dX, \theta = \theta_0 \rightarrow X = \cos \theta_0, \theta = 0 \rightarrow X = 1$ となる。

$$\begin{aligned} S &= 2\pi \int_1^{\cos \theta_0} \sqrt{3(1 - \cos^2) + 1} (-dX) \\ &= 2\pi \int_{\cos \theta_0}^1 \sqrt{4 - X^2} dX \\ &= \pi \left\{ \left[X \sqrt{4 - X^2} + 4 \sin^{-1} \frac{X}{2} \right]_{\cos \theta_0}^1 \right\} \\ &= \pi \left\{ \sqrt{3} + \frac{2}{3} \pi - \cos \theta_0 \sqrt{4 - \cos^2 \theta_0} - 4 \sin^{-1} \frac{\theta_0}{2} \right\} \end{aligned}$$

$\frac{dS}{d\theta_0}$ を求める。

$$\begin{aligned}\frac{dS}{d\theta_0} &= \sin \theta_0 \sqrt{4 - \cos^2 \theta_0} + \frac{2 \cos^2 \theta_0 \sin \theta_0}{2\sqrt{4 - \cos^2 \theta_0}} - \frac{4}{1 - \cos^2 \theta_0} \cdot \left(-\frac{\sin \theta_0}{2} \right) \\ &= \sin \theta_0 \sqrt{4 - \cos^2 \theta_0} + \frac{\cos^2 \theta_0 \sin \theta_0}{\sqrt{4 - \cos^2 \theta_0}} + \frac{4 \sin \theta_0}{4 - \cos^2 \theta_0} \\ &= \frac{1}{\sqrt{4 - \cos^2 \theta_0}} \{ \sin \theta_0 (4 - \cos^2 \theta_0) + \cos^2 \theta_0 \sin \theta_0 + 4 \sin \theta_0 \} \\ &= \frac{8 \sin \theta_0}{4 - \cos^2 \theta_0}\end{aligned}$$

4 問題

複素平面上の中心 a 、半径 r の半円 $C_r(a)$ を $C_r(a) = \{z = a + re^{i\theta}; 0 \leq \theta \leq \pi\}$ で定める。ただし、 $i = \sqrt{-1}$ である。

1. 正則関数 $f(z)$ に対して次式を示せ。ただし、 $z = a + \epsilon e^{i\theta}$ において考えよ。

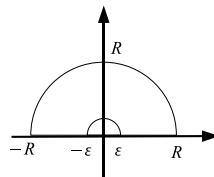
$$\lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{C_\epsilon(a)} \frac{f(z)}{z-a} dz = i\pi f(a)$$

2. 不等式 $\frac{2}{\pi}\theta \leq \sin\theta$ ($0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2}$) が成り立つことを示せ。

3. 2. の結果を用いて次式を証明せよ。

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \int_{C_R(0)} \frac{e^{iz}}{z} dz = 0$$

4. 関数 $\frac{e^{iz}}{z}$ の積分を図の矢印に示す道に沿って考えることにより、定積分 $\int_0^\infty \frac{\sin x}{x} dx$ の値を計算せよ。

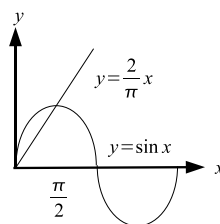


4.1

$$\begin{aligned} \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{C_\epsilon(a)} \frac{f(z)}{z-a} dz &= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_0^\pi \frac{f(a + \epsilon e^{i\theta})}{\epsilon e^{i\theta}} \epsilon i e^{i\theta} d\theta \\ &= \int_0^\pi i f(z) d\theta \\ &= i\pi f(a) \end{aligned}$$

4.2

$y = \frac{2}{\pi}\theta$, $y = \sin\theta$ を図に示す。図より不等式 $\frac{2}{\pi}\theta \leq \sin\theta$ が成り立つことが分かる。



4.3

$$\begin{aligned}\lim_{R \rightarrow \infty} \int_{C_R(0)} \frac{e^{iz}}{z} dz &= \lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^\pi \frac{e^{iR(\cos \theta + i \sin \theta)}}{Re^{i\theta}} R i e^{i\theta} d\theta \\ &= \lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^\pi i e^{iR \cos \theta} \cdot e^{-R \sin \theta} d\theta\end{aligned}$$

絶対値をとると次の大小関係が成り立つ。

$$\left| \lim_{R \rightarrow \infty} \int_{C_r} \frac{e^{iz}}{z} dz \right| \leq \lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^\pi e^{-R \sin \theta} d\theta$$

$\sin \theta$ の $0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2}$, $\frac{\pi}{2} \leq \theta \leq \pi$ に対する対象性から積分範囲を次のように変更する。

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^\pi e^{-R \sin \theta} d\theta = 2 \lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^{\frac{\pi}{2}} e^{-R \sin \theta} d\theta$$

4.2 の不等式から次式が成り立つ。

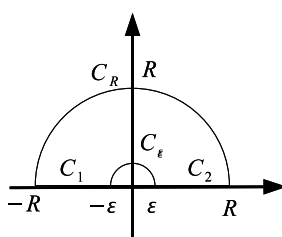
$$\begin{aligned}2 \lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^{\frac{\pi}{2}} e^{-R \sin \theta} d\theta &\leq 2 \lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^{\frac{\pi}{2}} e^{-\frac{2}{\pi} R \theta} d\theta \\ &= 2 \lim_{R \rightarrow \infty} \left[-\frac{\pi}{2R} e^{-\frac{2}{\pi} R \theta} \right]_0^{\frac{\pi}{2}} \\ &= 2 \lim_{R \rightarrow \infty} \frac{\pi}{2R} (1 - e^{-R}) \\ &= 0\end{aligned}$$

絶対値が 0 になるので、次式が証明される。

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \int_{C_R(0)} \frac{e^{iz}}{z} dz = 0$$

4.4

積分路を次のようにとる。



$$C = C_1 + C_2 + C_\epsilon + C_R$$

このとき、 C 内部に $\frac{e^{iz}}{z}$ の特異点は含まれない。したがってコーシーの積分定理から C 上の積分について次式が成り立つ。

$$\int_C \frac{e^{iz}}{z} dz = 0$$

C_1, C_2 上の積分を I_1 と表す。積分路はそれぞれ次のようにとる。

$$\begin{aligned}C_1 &: z(x) = x \quad (-R \leq x \leq -\epsilon) \\ C_2 &: z(x) = x \quad (\epsilon \leq x \leq R)\end{aligned}$$

積分を求める。

$$\begin{aligned} I_1 &= \int_{C_1+C_2} \frac{e^{iz}}{z} dz \\ &= \int_R^\epsilon \frac{e^{ix}}{x} dx + \int_\epsilon^R \frac{e^{ix}}{x} dx \\ &= -\int_\epsilon^R \frac{e^{-ix}}{x} dx + \int_\epsilon^R \frac{e^{ix}}{x} dx \end{aligned}$$

$\epsilon \rightarrow 0, R \rightarrow \infty$ とする。

$$\begin{aligned} I_1 &= \int_0^\infty \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{x} dx \\ &= 2i \int_0^\infty \frac{\sin x}{x} dx \end{aligned}$$

次に、 C_ϵ 上の積分を I_ϵ と表す。 $\epsilon \rightarrow 0$ とする。

$$\begin{aligned} \lim_{\epsilon \rightarrow 0} I_\epsilon &= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{-C_\epsilon(0)} \frac{e^{iz}}{z} dz \\ &= -i\pi e^{iz} \Big|_{z=0} \\ &= -i\pi \end{aligned}$$

C_R 上の積分を I_R と表す。 $R \rightarrow \infty$ とする。

$$\begin{aligned} \lim_{R \rightarrow \infty} I_R &= \lim_{R \rightarrow \infty} \int_{C_R(0)} \frac{e^{iz}}{z} dz \\ &= 0 \end{aligned}$$

以上の結果から、次の等式が成り立つ。

$$\begin{aligned} I_1 + I_\epsilon + I_R &= 2i \int_0^\infty \frac{\sin x}{x} dx - \pi i \\ &= 0 \end{aligned}$$

したがって求める積分値は次のようになる。

$$\int_0^\infty \frac{\sin x}{x} dx = \frac{\pi}{2}$$